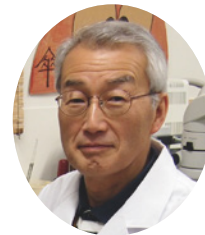


木材利用の試験研究機関に勤務して⑫

～普及課で世間の広さを学ぶ・中編～

旭川工業高等専門学校 名誉教授 富樫 巖



■普及業務とは？

林産試験場の普及業務はいかにあるべきか？道立試験研究機関の普及業務には何が求められているか？などを自分なりに解釈・そしゃくする精神的余裕もなく、最初の2年間は不慣れな分野に対する不安や自信のなさを抱えながらも目の前の業務遂行に全力投球しました。普及業務の神髄は悟れないものの、3年目に入ると門前の小僧のごとくにルーチンワーク的な業務処理については対応できるようになりました。振り返れば6年もの期間留まり続けた普及課長ポストでした。

21世紀を目前にした2000年前後の大学組織に注目すると、「リエゾン・オフィス」とか「エクステンション部門」、さらには「TLO」や「産学連携本部」などの（小生には）聞きなれない組織が立ち上がりつつありました。特許などの知的財産含む大学の研究成果やその研究組織・人材を社会や企業などに知らしめて実社会で活用してもらう、または共同研究で実用化を目指そうとする時代感がありました。大学が保有する研究成果を売り込むだけでなく、大学と産業界との連携活動や大学の社会貢献・社会連携が究極的な狙いであり、リエゾン（Liaison：元々はフランス語で連携・橋渡し・つなぐの意味で、組織や人物間のつながりや関係を表す際に使われる）やエクステンション（Extension：社会貢献，社会連携）が使われたのでしょうか。国立大学の独立法人化に向けた制度改革が明らかになり、大学としても入学者以外のひいき客の確保（組織同士のつながり，人と人のつながり）を意識し出したタイミングだったと想像します。

話を戻します。小生が対応に迫られた目の前の業務とは、一般市民対象イベントの「木のグランドフェア」と各支庁単位で木材産業界および関連業界・行政などと情報交換する「林産技術交流プラザ」です。業務の重さに加えてマンネリとの指摘・陰口が聞こえる事業でした。大げさかも知れませんが、両者は林産試験場の準伝統的的事业であり、小生の身勝手な解釈としては「前向きのマンネリ活動」が継続を支えていました。

■木のグランドフェア

木のグランドフェアは林産試験場と（一社）北海道林産技術普及協会の共催事業で、木の良さを一般市民に広く知らしめるイベントとして、1992年度から小中学生の夏休み期間中にあわせてロングラン開催していました（会場：林産試験場）。ターゲットの客層は小中学生とそのファミリーです。親子日曜大工教室や木作品コンクールなどを設けて木材に触れる機会をつくり、木製品に対する理解や生活の中で木材を利用する意義の浸透を狙っていました（写真1）。



写真1. 木のグランドフェアのメイン会場となる林産試験場内のログハウス・木路歩来と木と暮らしの情報館（上）、および同フェア・イベントの親子日曜大工教室（左下）とおもしろ研究見学ツアー（右下）

注：ウッドエイジ2001年6月号（上，左下）と林産試だより2002年9月号から引用

木のグランドフェアの開催記録をみると、オープニングイベントおよび中間イベント（両者とも土日開催）がそれぞれ「ウッドサマーフェスティバル」または「親子日曜大工教室」（写真1左下）でした。「ウッドサマーフェスティバル」ではおもしろ研究見学ツアー（写真1右下）と命名した場内の見学会，ボードテーブルを作る木工体験講座などの各種イベントを設定し，全職員がほぼ総出で来場者対応に励みました。「親子日曜大工教室」では小中学生を含むファミリー

チームに木製ベンチ、花壇用木製柵、木製テーブル&イスセットなどの木製品を組み立てる工作に励んで頂きました。林産試験場職員が工作の指導・アドバイス役を担当し、参加した市民とのコミュニケーションを取ります。さらに、完成した木製品の仕上がり具合を外部審査員などが評価し、共催者が表彰（表彰状と副賞を贈呈）するコンクールも設けていました。

親子日曜大工教室や木工体験講座の正確な募集チーム数や募集人数を忘れてしまいましたが、人気のモノづくりイベントとなって多くの方が参加しました。一方、普及課では木工作用の材料としてトドマツ間伐材（丸太）を必要量購入しており、予算の減少から規模縮小が不可欠な状況となっていました。加えてウッドサマーフェスティバルと親子日曜大工教室で通算4日間の土日勤務となるため、職員の働き方改革を求める声が大きくなっていました。そして2003年度の第12回木のグランドフェアから大きな変化が生じました。

■「ウッドサマーフェスティバル」から「木になるフェスティバル」へ

2002年夏の終わり頃でした。当時のS場長から呼び出され、ぎょろりとした目を向けられて「お前はいつまで4日間もの土日イベントをやる気なのか？」と問われました。迷うことなく小生は、「可能ならば1日で終えたいです」と即答しました。その結果、2003年度からの木のグランドフェアではウッドサマーフェスティバルと親子日曜大工教室を統合した「木になるフェスティバル」（土曜日だけの1日開催）となりました。

それまでの10年強のイメージがしみ込んだ「ウッドサマーフェスティバル」を、新しいオープニングイベント名に使いたくなかった小生は新名称を考えることにしました。当時の旭川木材青壮年協議会に、「木になる委員会」なる「分科会」が存在することを偶然に知りました。それをヒントに一般市民からみて「気になる（興味を引かれる）夏のイベント」になって欲しいとの思いから、「木になるフェスティバル」を提案しました。その名称が現在も使用されていることに密かに感謝しています（イラスト1）。

■主催者視点からの一般市民対象イベントの難しさ

普及課長3年目に小生は、「市民に対する木材利用文化普及啓発活動を考える一木のグランドフェアの歴



イラスト1. 林産試験場のHPにアップされた「木になるフェスティバル」の案内

注：林産試験場 <https://www.hro.or.jp/list/forest/research/fpri/event/fes.html> (2023. 8. 19) を引用、一部抜粋

史と今後について」と題したエッセイをウッドエイジに投稿しました（2001年6月号に掲載）。モノづくりイベント参加者に対して間伐材の意味や工作中的木材樹種への興味を訪ねた聞き取りアンケートを実施したところ、主催者の思いとはかけ離れた回答でした。手前味噌ですが、木材利用（文化）の普及活動を担う方々にご一読頂きたい拙稿です（<https://rinsan-fukyu.jp/wp-content/uploads/woodyage/2001/200106A.pdf>）。

■林産技術交流プラザは歴史あるエクステンション活動（≒リエゾン活動）の一つ

全道各地域に林産試験場の職員がお邪魔し、主に木材産業関係者と情報交換（技術相談対応を含む）する「移動林産試験場」は1981年度から始まり、好評を得たとの記録があります。そして1984年度から「林産技術交流プラザ」に衣がえしました。名称が変わっても両者は林産試験場のエクステンション活動で、「地域企業への貢献、地域企業との連携」を図る取り組みです。

情報化が進んでも、欲しい情報を得ることは意外と難しいです。旭川で来客を待つスタンスから、新規の技術情報などを持って各地域に出向くことは的を射た活動だと思います。一方、続けることはマンネリ化との闘いでもあり、その業務遂行は複雑です。あくまでも個人的意見ですが、『業界や地域のニーズに応える試験研究成果が不足だと地域企業や行政関係者の方々に林産試験場の訪問を喜んで頂けない』と感じ続けた6年間でした。

（つづく）